


別記様式第4

論文の要旨

ふりがな 氏名	みぞぶち そのこ 溝 渕 園 子 
論文題目	〈翻訳〉の文学誌 —近現代の移動と文化表象に関する日露比較文学的研究—
論文の要旨 別紙参照のこと。	

備考 要旨は、4,000字以内とする。

〈翻訳〉の文学誌—近現代の移動と文化表象に関する日露比較文学的研究—

溝渕 園子

本論文は、近現代の日本及びロシアの文学における、空間的、言語的なシステム間の移動と、文学を基軸とした様々な文化表象との相互関係を〈翻訳〉の観点から明らかにし、制度としての〈文学〉を再検討しようとするものである。日露相互の文学空間の中で、翻訳と文化表象がどのように関わり合い、各々の文化をめぐる自己像や他者像の形成と変容の過程に組み込まれていくのか、また翻訳は各々の〈文学〉というシステムをいかに照射するのかという問題について、今日の翻訳研究の理論的到達点を視野に入れつつ、具体的な作品の分析を通して考察する。

日本において、近代文学の形成と変容の歴史は、翻訳という営為と深く結びついている。明治期以来、書き手や読み手の立場から、翻訳に関与しなかった作家はいないと言っても過言ではない。日本文学史上の芸術思潮や文学理念が、日本の翻訳文学史上のそれと呼応することは、従来から指摘されてきた。ロシアをはじめ外国文学・芸術の翻訳は、各国文学・芸術の紹介であると同時に、そこから創作上の手法やスタイルを摂取するための源泉でもあった。こうして成立した日本近代文学を、旧ソ連／ロシアは翻訳し、自国の文学システムに取り入れ、各時期の文学的〈正統性〉を不断に再生産していったのである。だが、実践としての異言語間翻訳は、自国の文学に内在する制度を照らし出し、それに対する抵抗や破壊の戦略を生み出す動力にもなる。また、文学とそれ以外のジャンルという異なる記号との間に成立する翻訳は、従来の翻訳の概念を拡大し、それぞれの文化領域を架橋する可能性を孕むものでもある。

日本近代文学における〈西洋文学〉の影響と受容という問題は、日本の比較文学研究が文学の世界史を探求する中で、長年にわたり取り組んできた主要なテーマであり、既に多くの成果が存在する。また、研究の場で軽視される傾向にあった文学の翻訳は、1970年代半ば以降、翻訳研究において根本的に発想を転換させたポリシステム理論(polysystem)をもとに、近年では自国の文学の一分野として扱われる翻訳文学へと変化した。文学の翻訳研究は、グローバル化時代の中で急速な進展を見せており、日本文学を世界の文芸市場に接続し、世界文学との関係性を問う議論も活発化している。

こうした先行研究の成果を参照しつつ、本論文では、文学における異文化の受容(摂取)の問題を〈翻訳〉の視点から様々なレベルで再考する。日本とロシアの間で、互いの文学や文化が、翻訳者や作家たちによっていかに読み替えられたのか、そしてそれはいかなる文学システムと関わっているのかを議論する。本研究では、翻訳を閉じた複数の言語共同体間をつなぐ〈媒介者〉と捉えるにとどまらず、空間的、言語的〈移動〉との関わりにお

いて、文化表象の攪乱契機をもたらす媒介であり、動的行為であると定める。なお、本論文で述べる〈移動〉は、ポストコロニアル理論の移民や難民と関連づけて論じられる〈移動〉の意味とは異なるものである。

また、ポリシステム理論によれば、文学ポリシステムでは、文学の各ジャンルがすべて支配的位置を求めて競うため、中心部と周縁部の間に常に緊張関係が存在する。文学の中心に位置づけられる〈名作〉や高く評価される文学様式は、文学システムの周縁部の低位に置かれた構成要因、あるいは〈正統〉とは認められないジャンル—児童文学、翻訳文学、大衆小説等—から刺激を受けるとされている。こうした問題意識から、本論文の各論では、システムの〈中心〉的な作家や作品と、〈周縁〉に配されてきた翻訳者や翻訳文学を研究対象として取り上げ、双方から文学という制度について考察する。

文学の翻訳、つまり translation は語源的に、trans = 横切る + la | tus = もたらされる、であり、またロシア語の *перевести* (完了体) は *пере* = 越える + *вести* = 運ぶであることから、その行為自体、何かを越える「移動」の意味を内包していると言える。翻訳は、文化の伝達において重要な役割を担うものの一つであるが、それは知的・文化的動向を示すと同時に、異文化間の、またこれらの文化を含む地政学的な権力の動態をも映し出す。19世紀後半以降の近代化の流れの中で形成された日本近代文学という〈商品〉は、日本の文芸が〈西洋〉文学と接続された瞬間から、世界文学空間の中へ巻き込まれていった。ここで働く翻訳のポリティクスの検証によって提示される様々な問題系は、グローバル化時代と呼ばれる現在の多様な文化の問題系と連結され得る可能性を有している。

本論文は6章から構成されており、以下に各章の概要を述べる。

第一章「文学の翻訳から翻訳文学へ」では、転換期にあった明治39年の翻訳論、昭和20年前後の太宰治の翻案についてのエッセイ、平成6年頃の村上春樹の小説を取り上げ、以下の各章での議論の前提となる諸問題を提起した。ここで扱うテキストは、順に、文学の翻訳についての議論から、従来の領域としての翻訳文学、さらにそこから翻訳の核ともいえる性質を戦略的に創作に転用した新たな〈翻訳文学〉へと展開する過程を描き出している。

第二章「移動の文脈における〈翻訳者〉と文化翻訳」では、文化翻訳の視点から、劇作家・小山内薫及び作家・宮本百合子のロシア／ソ連外遊という移動体験に基づく演劇論や紀行文を主要な分析対象として、理念の変化やそこでの文化表象、及びそれらを成立させる構造を考察する。ロシア演劇や都市モスクワという文化が、日本の観客や読者に向けていかに翻訳されたかを明らかにし、小山内と宮本が〈翻訳者〉という主体を生きていたという、従来論じられなかった側面に光をあてた。

第三章「日露戦争期前後の日本の翻訳文学」では、日本において最初のロシア文学の翻訳ブームを迎えた日露戦時下で、せめぎ合いを見せていた複数の翻訳規範を探る。L. トル

ストイ「クロイツェル・ソナタ」の翻案小説や、A. チューホフ「六号室」の二種の翻訳、L. トルストイ「コーカサスのとりこ」の三種の初期翻訳の分析を通して、書き直しと書き換え、直接訳と重訳の価値づけ、文学化と翻訳の等価性など、現代の翻訳論にも連なる複数の規範が機能していたことを指摘した。

第四章「日本文学のロシア語翻訳とロシア文学における日本人表象」では、ロシアにおける日本ブームとその文化的消費の基底にある、日本文学の翻訳をめぐるシステムと文化表象としての日本人について検討する。旧ソ連／ロシアの芥川文学と三島文学の翻訳事情から、文学の古典（カノン）に吸収されそれを補完する〈正統〉な翻訳文学のありようと、旧来の〈正統〉を破壊する象徴として機能する〈周縁〉の翻訳文学の様態を明らかにした。また、ソ連時代の現代大衆小説「オキヌさんの物語」（V. ピークリ）のように、文化表象としての〈日本〉や〈日本人〉という文化表象が、ジャポニズムとジャパノフォビアを共存させながら、翻訳された日本文学のモチーフを摂取し、旧ソ連時代から現在に至るまで形成・変容の途を辿ってきたことに言及した。

日本においてもまた、文化表象としてのロシアは、日本人のロシアに対する憧憬と嫌悪とを混淆させつつ形成され、時に曖昧模糊とした衣を纏ったが、そこにロシアの翻訳文学も関わってきた。その様相について、第五章「異文化表象と女性の周縁化」で論じている。夏目漱石「それから」と日露戦争期の少女雑誌『少女界』を取り上げ、前者では表象としての「恐露病」が文学的モチーフとして消費されたことと、後者ではロシア像を反復的に提示しながらもロシアの具体像から少女読者が引き離されていく矛盾した構造を示し、それがロシア表象の両義性を生み出した要因の一つであると論じた。また、他者としての異文化は、必ずしも、自己の〈外〉に存在するものとは限らない。自己の〈内〉なる文化に異文化を見出す視線があることを、紀行文「五足の靴」の分析を通して考察した。

第六章「翻訳の可能性と文学の越境性」では、様々なレベルの文学表象について、〈文学〉とミュージアムとの関係まで議論を広げ、〈翻訳〉から見通す文学の未来の可能性について論じた。翻訳は言語交通と闘争の場であり、翻訳不可能性の問題から逃れることができない。それを夏目漱石の「坊っちゃん」の露語訳から跡づけた。だが、そうした翻訳不可能性は新たな文学戦略を錬成する場であることを水村美苗「私小説 from left to right」のテキストの分析を通して示した。さらに、翻訳は、それが〈媒介〉行為である以上、〈文学〉とそれ以外の文化領域との間を架橋する可能性を有している。この具体例として、文学ミュージアム「夏目漱石内坪井旧居」を取り上げ、作家と文学ミュージアムが、言語と視覚表象を包括するような文学空間を形成していることを明らかにした。

以上の各論を通して、概して、第一章から第三章までは、翻訳という言語的移動の媒体、及び文化表象と空間的移動との関係について、第四章から第六章までは、翻訳による表象の文化的消費と、制度としての〈文学〉との関係を視野に入れながら論じている。日本とロシアの近現代文学における翻訳の様態とその位置づけを迫ることによって、世界文芸市場というシステムと各国〈文学〉の制度との関係を考察する回路が示されたと考える。